

第4節 絨維産業

1 絨維輸出が外貨の稼ぎ頭

「機関車」役を果たす絨維産業

中国の絨維産業は、国内の豊富な天然絨維原料を基礎に、また豊富・良質な労働力もあつて紡織業を中心に解放前から発展してきた。もつともその原動力になつたのは民族紡とともに日系資本の「在華紡」と欧米紡ではあつたが、そうした旧資産を一方でベースにするとともに新中国建国後も絨維産業は、国内の各産業セクターの中で一段とその重要性を高め、企業（工場）数、雇用数、生産額、外貨獲得高などの面で他の工業を大きく凌駕し、発展してきた。まさに中国の工業化の先導的な役割を果たしてきたといえよう。

やや一般論になるが、国が工業化を進める過程でその先導役を果たす工業は、その国の置かれた環境や資源保有の状況にもよるが、軽工業、それも紡績、織布など絨維工業がベースになっている場合が多い。しかも紡績、織布、染色、縫製などの各工業セクターが、きわめて労働集約的であること、雇用吸収力がきわめて高いことも大きな特色である。さらに資本投資が初期段階においては比較的少額で済むこと、資本の懐妊期間が短いこと、資本装備率が低くてもその初期段階では内外の競争要因

として不利になりにくいことなどが、繊維産業が工業化の柱になる要素といえよう。さらに加えれば、低廉・豊富な労働力が存在することも重要なファクターである。これは何も、繊維工業に特有の条件ではないが、繊維産業勃興のより有利な側面であることは否定できない点であり、中国の繊維産業が四九年の新中国誕生以来、急成長してきた背景には、上記のようないわば「工業化基盤」がすでに出来上がっていた点が大きな要素であったといえる。また、これが中国経済全体の「機関車」役を果たしてきたともいえよう。

総輸出の四分の一が繊維品

九〇年の中国の繊維品輸出額は、一四九億ドルに達した。ここでいう繊維品とは、綿花など繊維原料と糸・織物、衣類など繊維二次製品の合計であるが、これは韓国の一五億ドル（九〇年）に次ぐ地位にあり、今や世界屈指の輸出大国である（イタリア、ドイツ、香港が韓国より上位にあるが、こうした地域の域内輸出や再輸出を考慮すると、中国は実質的に韓国に次いで世界第二位）。「対外開放」政策を打ち出した七八年の繊維品輸出は、わずか二億ドルにすぎず、この間、年率一七％強の急拡大をしてきたことになる。特に八〇年代初めまでは、糸・織物が繊維品輸出の中心であったが、八五年頃から補償貿易や加工貿易の拡大を通じて衣類などの製品輸出が急拡大し、三部門の比率は繊維原料が七％、糸・織物が四六％、衣類が四五％と衣類のウェイトが高まっている。ちなみに八〇年の衣類の比率は二七％であった。こうした衣類輸出の急成長を背景に外貨の「稼ぎ頭」としての地位を今日もなお堅持し、総輸出額に占める繊維品の比率は、四分の一を占める健闘ぶりである。

2 紡織工業の発展

建国当初、経済復興の目玉に

ところで、中華人民共和国がスタートした四九年の紡織工業の実態は必ずしも明らかではないが、全国工業総生産額に占める紡織工業の比率は四割に達しており、新中国建国の原動力の一部門であり、重要な役割を果たした。

新中国建国当初の四九〇五二年、経済復興期当初の紡織工業の設備規模は、諸説があるが、綿紡機五〇〇万錠前後、綿織機は六万台程度に達していた模様であるが、稼動可能な紡機は実質一八〇万錠程度、綿織機は四万台を割る水準で、しかも電力不足、原材料不足、資金不足、職工不足など困窮をきわめたほか、経営基盤の荒廃、設備の老朽化もあって稼働率は五〇%を下回る状態であった。こうした中で中央人民政府はいちはやく紡織工業部を設立、旧来の官僚資本紡織企業の公営化、全体の五割前後の設備規模をもつ私企業には原料供給、製品の買上げなどを通じて中央集権化を強めつつ生産規模の復興をはかった。また、原料確保のために綿花生産の奨励をはかり、買上価格の優遇措置を講じた。さらに新規の紡織工場の建設にも着手し、積極的な復興介入工作を通じて、五二年にはほぼ解放前の生産記録を超過する水準にまで生産が回復した。まさに、経済復興の目玉に繊維産業がなったわけである。

第二期ともいふべき五三〜五七年は最初の五カ年計画期である。この間、綿紡織業を中心とした規模の大型化が進められた。また、同時に毛、麻、シルクの各工業もその生産能力を拡大した。北京、石家庄、邯鄲、蘇州、西安の各地に紡織工業の新基地が建設され、大中規模の紡織工場が全国で六〇余件、うち綿紡機は二四〇万錠に達し、綿織機六・一万台、新規に染色工場六件、毛紡織工場三件、麻紡織七件、シルク四件、化繊三件と紡織機械工場一件がそれぞれ建設された。かたや老朽設備の改造、経営の合理化、技術改良も全国レベルで進展した。しかもこうした拡張設備は一、二の例を除いてほとんどが、自前で供給したこともこの時期の特色といえよう。

経済調整で拡大テンポが失速

第三段階に当たる五八〜六六年の期間は、第二次五カ年計画で中国経済が「大躍進」政策のもとで経済のバランスを失して、六三年からは経済調整期を迎える時期であるが、紡織工業もこの影響を大きく受けるところとなった。第一次五カ年計画を基礎に原料に当たる化繊工業の本格的な創業期であるこの時期、新設の遅延などにみまわれたほか、川中の紡織工業はいわば「盲目的」設備拡張が行なわれたものの、深刻な食糧不足のなかで競合作物である綿花、さらには羊毛、麻、繭などの大幅な減収による原料不足が深刻化した。この結果、六二年には綿糸生産は五五万トンと五七年の六五%の水準に止まり、操業率は六〇%を割り込む状態であった。

さらに第四段階の六七〜七七年も中国経済はけっして順調ではなかった。この間、第三次、第四次五カ年計画とつづく第五次五カ年計画の二年間に当たるこの時期は、化学繊維工業と紡織業の生産能

力の拡大、技術革新に重点をおくことを目標にしていたが、「文化大革命」により経済活動は大きく後退、混乱を重ね、紡織工業も貴重な人材の下放のもとで、特に生産技術や生産管理の面での停滞を余儀なくされた。しかし、民生の安定という観点から國務院は軽工業重視策を明確にし、さらに「軽工業では紡織を重点に、紡織工業では化繊を重点に」と化繊工業、なかでも合繊への本格的な参入を開始した。七〇年代初め、それまでのレーヨン主体の化繊工業は、上海、遼陽、四川、天津の四大合繊プラントの建設着工に着手、本格的な合繊工業化への口火を切ったことになる。時期はややずれるが、六六年から七五年にかけての紡織業の設備増強は、化繊が一八・七万トン、内合繊が一〇・二万トン、綿紡機は四二八万錠、毛紡機は一四万錠、絹織機は約一万台の増加をみている。

「大紡織」を実現、完結的な工業体系に

続く七八年から現在に至る第五段階では、第十一期三中全会の「改革・開放」政策の推進の下で中国経済が外資との関係を深め、大きな変化を遂げた時期である。紡織工業は外貨獲得のため、委託加工貿易など積極的な輸出奨励が行なわれる一方、八六年にはそれまで軽工業部傘下にあった「服装工業総公司」（アパレル）、國務院の下に所轄されていた「絲綢公司」（シルクの各部門を紡織工業部の管理下に包括し、原料から製品に至る完結的な工業体系の完成を目指した「大紡織」を行政レベルで実現した。さらに貿易と生産部門を結びつける動きや加工段階の垂直連携、同業種間の提携も含む「横向き連合」などが具体化し、効率的な加工体制づくりに励んだ。また、この時期、先の合繊大型プラントが相次いで完成、最終規模として年産四〇万トンに達する超大型ポリエステルプラント儀征化繊工

業連合總公司の建設にも着手、八七年からこれの段階的な立ち上がりで急速に合織の自給化を進めた（九〇年に完成）。また、綿、毛など紡織段階でも設備増強を進める一方、郷鎮企業の急速な台頭の下で小規模紡織の乱立という混乱状態を招きつつも設備規模が急速に拡大。こうした設備増強と原料供給がマッチせず、これに流通段階の混乱（売惜しみ、思惑買ひなども含めて）が加わり、これが八七〜八八年にかけて深刻化した「原料戦争」の導火線にもなるなどマイナス局面もあつたが、総じて紡織工業は拡大路線を歩んだといえよう。特にこの七・五計画期における紡織業の歩みは、充実した時期といえよう。

3 繊維産業の実態

中国の繊維産業は、すでにみたように伝統的な重要産業として位置づけられており、外貨獲得、雇用吸収、綿花、石油など国内資源の活用、民生の安定・拡大、さらには国家財政の有力な財源として国民経済の発展に大きく寄与している。七八年以来、輸出振興を前面に打ち出し、中国経済の拡大、発展のために先導的な役割を繊維産業が果たしてきた。次にいくつかのポイントから繊維産業の現状をみてみる。

* 中国でいう「紡織」には、いわゆるテキスタイル（紡績、織物、染色）と Apparel（衣類縫製）を包括する場合（本節では繊維産業としている）とテキスタイル部門だけをいう場合とがあるが、例えば紡織工業部の所轄

統計には繊維機械工業、化学繊維工業を包括して生産額などが発表されている。なお、厳密には化繊工場でも
独立企業群の石油化工総会社の傘下にある企業もある。

繊維産業の位置づけ

紡織工業の総生産額は、表IV-14のとおり全工業生産額の一五%前後を近年占めており、中国のトップ部門であり、特に七八年以降、年率一二・三%の成長を遂げている。また、輸出額では、総輸出に占めるシェアが九〇年には二五%に達し、総額一四六億ドル、日本の同輸出額七二億ドルの二倍の規模に達しているのみならず、中国の原燃料輸出総額に近い水準に達し、まさに外貨の稼ぎ頭ということができる。

また、紡織工業の雇用吸収力の面でも八〇〇万人近い規模を有し、工業部門中最大シェアの一三%を占め、とりわけ女子の雇用比率が高い(六〇%)のが特色でもある。さらに国内の消費部門では、衣類売上げが小売り総額の一七%を占めている。

主力製品で世界のナンバーワン

国際的な観点から中国の繊維生産をみると(表IV-15)、綿花の生産では耕作面積の拡大、品種・土壌改良、灌漑施設の整備などの結果、米国、ソ連を八〇年初頭に追い抜き今日まで世界のトップの座を維持し、世界の綿花需給への大きな影響力をもっているほか、綿糸、綿織物でも世界第一の生産国である。また、生糸、麻(亜麻、ちよ麻)、カシミヤ、アンゴラでも世界生産の過半を占めるなど世界屈指

第IV章 主要産業の動向

表IV-14 紡織工業の主要指標

	紡織工業総生産額		紡織工業利税総額		繊維品販売総額		繊維品輸出総額	
	億元	構成比 (%)	億元	構成比 (%)	億元	構成比 (%)	億ドル	構成比 (%)
1952	94.3	27.4	7.2	19.3	50.8	19.3
1970	324.2	13.4	70.5	14.9	170.2	23.4	6.0	26.3
1975	396.1	12.3	78.7	13.5	219.4	21.0	16.3	22.5
1978	529.1	12.5	110.4	14.0	278.5	22.0	28.3	29.1
1980	735.5	14.7	149.9	16.5	413.7	23.0	49.5	27.1
1985	1,258.0	15.1	117.2	9.6	717.4	18.9	64.4	23.6
1986	1,351.0	15.0	137.0	10.2	772.6	17.7	82.8	26.8
1987	1,710.3	14.7	145.5	9.6	882.3	17.2	110.5	28.0
1988	1,938.7	14.0	173.5	9.8	1,108.8	17.0	130.0	27.4
1989	146.7	28.0

(注) (1)紡織工業には縫製工業は含まない。

(2)利税総額は全民所有制企業のみ。

(3)構成比は全国計に占める比率。

(出所) 『中国統計年鑑』：『海関統計』。

表IV-15 中国の繊維生産の世界ランキング (最近時点)

品 目	世界シェア (%)	順位	時点	品 目	世界シェア (%)	順位	時点
綿 花	24	1	1990	毛 織 物	5	5	1989
化 織	9	4	1990	ア ン ゴ ラ	90	1	1989
ポリエステルS	13	2	1990	カ シ ミ ヤ	56	1	1989
生 糸	57	1	1988	綿 糸	26	1	1990
羊 毛	7	4	1990	綿 織 物	22	1	1990
毛 糸	6	5	1989	絹 織 物	40	1	1987

(注) (1)絹織物は輸出量。

(2)毛糸・毛織物は羊毛タイプ紡績糸・織物の生産で主要国に占める比率。

(3)ポリエステルSはステープルの略。

(出所) 各国際統計ほか。

の天然繊維素材の供給国である。化繊についても生産を急拡大しており、八六年には一〇〇万トンの大台を突破し、九〇年には一五八万トンと日本の一七〇万トンに接近して世界第四位の地位にある。なかでもポリエステルステープルの生産は、米国に次ぐ世界第二の規模に拡大している。さらに一一億の人口を擁する中国の繊維需要は、今日、世界の約六分の一を占めるにいたり、国際繊維需給への影響力を強めている。いわば、中国の繊維需給動向が国際需給を決定づける要素になつてきているといえる。

綿紡織が繊維産業の中核として君臨

次に繊維産業の構造をみると(表IV-16)、綿紡織工業のウェイトが全体の五〇%を占め、次いで化繊工業が一〇%、絹、毛、縫製とで残りを三分する形になつてはいるが、依然として綿業主体の繊維工業といふことができる。

表IV-16 繊維産業の部門別生産構成

(単位：億元)

項目	1970	1980	1985	1987	1989
紡織工業 (A)	293.2	666.6	957.8	1,093.9	1,250.7 (93.3)
化 織	8.4	49.8	64.0	101.5	197.9 (11.0)
綿紡織	206.3	438.9	590.6	650.6	695.2 (51.9)
毛紡織	13.7	34.7	77.2	97.1	105.4 (7.9)
絹紡織	24.5	45.8	84.1	86.6	91.2 (6.8)
縫製工業 (B)	…	…	…	82.4	89.1 (6.7)
合計 (A+B)	293.2	666.6	957.8	1,176.3	1,339.8 (100)

(注) (1)数値は実質価格。

(2)1987年以前の数値には縫製工業は含まない。

(3)カッコ内は構成比(%)。

(出所)『紡織工業統計年鑑』(紡織工業部所轄部門のみ)。

〈綿紡織工業〉

紡機、三六〇万鍾に

綿紡織工業は行政区分上「綿紡織印染工業」とされ、八九年現在六九五億元の総生産額を上げ、五二年から八九年までの平均成長率は六・三％に達している。最近でこそ伸びは化繊、毛紡織などを大きく下回っているが、八〇年代までは二桁成長を遂げてきた。五三年から八九年までに設備投資など固定資産投資額は四二五億元、紡織工業系統の総投資額九三〇億元の四五％を占め、繊維産業の中核部門として位置してきた。

設備については、ここ数年間、新增設に加えて在来設備の更新・改造が急速に進み、保有規模の拡大とともに老朽設備の入れ替えが進行している。公表数字によると四九年の五〇〇万鍾から八九年には三五六〇万鍾、九〇年には三六〇〇万鍾に拡大した。ちなみに日本の綿紡タイプの紡機は八〇〇万鍾程度であり、保有紡機の強大さを示している。また、通常、従来紡機(リング精紡機)の五倍以上の生産性をもつオープン・エンド紡機が、七〇年代は皆無に近かったが、八〇年代に入り急速に拡大、四〇万ローターに達し、単純に計算するとこれだけでも二〇〇万鍾強の紡機が増加したことになる。

綿織機については、統計上把握できる五七年の四二万台をベースに八九年には八四万台に増加、紡機同様に設備の近代化、革新化が進められ、よこ糸をたて糸に通す「杼」のない無杼織機(シャトルレス)が、これも八〇年代から積極的に導入され八九年現在一・五万台を数えている。ちなみに日本の綿織機は現在二〇万台規模に最盛期の約半分に縮小しているのとは対照的である。

表IV-17 繊維生産・加工設備状況

項目	単位	1957	1970	1978	1985	1988	1989
綿紡機	万錠	561.0	1,294.4	1,561.9	2,323.8	3,154.5	3,565.6
OE紡機	万R	…	…	…	11.4	30.8	39.3
綿織機	万台	…	37.9	49.7	66.7	79.8	83.8
無籽織機	1,000台	…	…	…	4.9	12.3	15.4
毛紡機	万錠	12.3	31.4	97.8	139.5	226.7	252.4
毛織機	万台	0.19	0.46	0.71	2.17	3.30	3.26
絹織機	万台	3.09	3.03	4.54	14.28	17.16	17.48
化繊生産能力	万トン	0.03	15.55	38.10	103.88	181.47	188.27
レーヨン	万トン	0.03	10.10	13.38	17.08	20.86	21.04
合繊	万トン	—	5.03	24.72	86.80	160.61	167.23
綿染色能力	億m	…	…	68.66	99.00	116.99	124.11

(注) いずれも公式発表による。

OE紡機(オープン・エンド)の単位はローター(頭)数。

(出所)「紡織工業統計年鑑」。

表IV-18 主要繊維原料と製品の生産推移

品目	単位	1952	1970	1978	1985	1988	1989
綿花	万トン	130.4	227.7	216.7	414.7	414.9	376.8
羊毛	〃	…	…	15.2	19.2	24.1	25.8
化纤	〃	…	10.1	28.5	94.8	130.2	147.8
レーヨン	〃	…	6.5	11.5	17.7	17.7	19.6
合繊	〃	—	3.6	16.9	77.1	112.5	128.2
ポリエステル	〃	—	0.1	5.1	51.6	83.7	94.7
ナイロン	〃	—	0.7	2.5	7.1	10.9	11.7
アクリル	〃	—	0.5	4.1	7.2	7.7	10.5
ビニロン	〃	—	1.9	4.8	8.0	6.1	5.4
綿糸	〃	65.7	205.2	238.2	353.5	465.7	476.7
純綿糸	〃	…	177.1	189.8	230.8	343.1	338.7
綿織物	億m	38.3	91.5	110.3	146.7	187.9	189.2
純綿織物	〃	…	78.0	85.5	82.1	118.7	117.9
生糸	万トン	0.56	1.67	2.97	4.22	5.10	5.23
絹織物	億m	0.65	4.32	6.11	14.49	16.87	16.28
化繊長織物	〃	…	…	3.44	11.53	12.54	12.12
毛織物	〃	1.8	0.58	0.89	2.18	2.86	2.80

(注) (1)糸、織物には混紡糸、交織を含む。(2)生糸には絹紡糸を含む。

(出所)「紡織工業統計年鑑」。

染色整理の能力は七二年から八九年にかけて年間七〇億メートルから一二五億メートルに拡大、この間の織物生産の増加にほぼ見合った加工能力の拡大となっている。設備的には浸染では高温・高圧染色機やプリントではスクリーン・プリンターなど総じて高生産性のものが近年増加しているのが特色である(表IV-17、18)。

糸、織物で「繊維化」が進展

こうした結果、綿製品関係の生産は、八〇年代を境に急拡大し、綿糸は七八年の年産二三八万トンから八九年に四七七万トンにほぼ倍増した。生産品種の構成では圧倒的に多かった純綿糸のウェイトが徐々に低下、ポリエステル綿混糸や繊維一〇〇%糸の比率が増加、二時点を比較すると表IV-19のようになる。

同様に綿織物関係も七八年の総生産一・〇億メートルから八九年には一・八九億メートルに拡大、特に純綿織物のこの間の増加一・四倍に対してポリエステル綿混などの混紡織物は二・六倍、シエアは一八%から二八%に拡大するなど、全体に「繊維化」が進展した。

〈繊維工業〉

外国技術の積極的な導入でキャッチ・アップ

それでは中国の繊維工業の実情はどうであろうか。

表IV-19 綿タイプ紡績糸の生産構成比 (%)

	純綿糸	混紡糸	繊維純糸
1978	80	16	4
1989	71	20	9

(出所) 紡織工業部『統計年報』。

九〇年の化繊生産は一五八万トン、七八年の二九万トンから五・四倍の規模である。この間の平均伸び率は一五%と急成長してきた。

化繊工業は、播籃期の五六〜六五年にかけてレーヨン（東ドイツ）、ビニロン（日本）、アクリル（英国）などのプラント、技術、ノーハウを海外から導入し、その基礎を確立した。さらに六六〜八〇年にかけては、これを基礎に海外からの技術協力を得て天津、上海、遼陽などで大型コンビナートの建設を進めた。八一年以降、経済調整などによる発展速度の鈍化もあつたが、上海化繊工場の拡大、儀征の超大型合繊プラントの建設などを進める一方、小規模（年産一万吨以下）紡糸プラントを近年、大量に海外から導入した。この結果、生産能力は六〇年以降ほぼ五年刻みでの倍増をつづけ、九〇年末現在、年産二〇〇万トン規模の生産能力を擁している。

全国に約四九〇件の化繊工場

化繊工業のいくつかの特色を整理すると、次の点が指摘できる。

(1) 全国に四九〇カ所以上に及ぶ工場が分散しており、原料（重合段階）は比較的大型かつ集中しているが、紡糸段階が小規模・分散していること

これについては、上海石油化工総公司、天津石化公司、遼陽石化公司、大慶石化総公司、儀征化繊連合公司、そしてやや特化品種であるが平頂山ナイロンタイヤコード工場、四川ビニロン工場などが大型石化、合繊プラントであり、他はこうしたプラントで生産されたチップを紡糸する小規模プラントが多い。このことは効率面でむしろ一般的にはデメリットが多いとみられている。

ポリエステルが二〇〇万トンに

(2) 品種がポリエステルに集中していること(化繊生産の六〇%)

この品種構成の偏りについては、先にみたように綿業主体の繊維工業であり、用途的に綿と親和性(混紡性など)の高いポリエステルに重点がおかれたことは否めない。さらにもう一つの柱であるシルク(絹工業の観点からみると同じように交織や代替素材としてのポリエステルフィラメントの有用性が高く、これもここ数年に急成長した品種である。ポリエステルステープルは八〇年当時、ようやく一〇万トンの大台にのせたが、上海、天津、儀征などの大型プラントの稼動をみて九〇年には六〇万トンの生産規模に拡大した。同フィラメントの拡大テンポはさらにはやく、八〇年には年産二・七千トンと試験生産の域を出なかったが、九〇年にはこれが四一万トンを記録し、両繊維合わせて一〇〇万トンに突破した。日本がポリエステルを商業生産したのが五八年、以来増設を重ねてきたが、九〇年にフィラメントが初めて四〇万トンの大台乗せを果たしたわけで、中国の急ピッチのポリエステル工業化とその需要の裾野の広大さがうかがわれる。

「量の時代から質の時代」を指向

(3) 量産、定番品種が主体であること

(4) 用途と素材の開発が遅れていること

この二点については、上記の点と関係していることで、依然として需要の拡大期にある間は、場合

によつては優位点としての意味合いさえもつてゐる。

しかし、現実には製品の特化や差別化には意欲的であり、紡織工業部はことあるごとに素材開発、品種開発の必要性を協調してゐる。化繊工業に限つたことではないが、八九年から紡織工業にとつて「量の時代から質の時代」への転換を打ち出しており、その対応が迫られてゐる。ちなみに紡織工業部が発表してゐる差別化、その中味はポリマーの段階で着色する、したがつて単色の糸や綿が紡糸される「原着」、紡糸ノズルを異型して紡糸する異型断面繊維、光沢の有無がある繊維の紡糸などのほか、静電気の発生を防止する帯電防止加工、ピリング（毛玉）を起こし難くする抗ピル繊維など機能面で付加価値をつけた繊維などが主流であるが、化繊全体では八五年の五万トン規模から九〇年には一六万トン程度に達してゐる模様である。

ともあれ、最近の十年間にいわゆる「合繊化」が急ピッチで進められた。綿紡織工業の繊維原料消費量のうち、化繊の占める比率は七八年当時、わずか七%であつたものが八八年には一七%のシェアに拡大してゐる。このうち合繊は三・五%から一四%の比率に上昇してゐる。同様に一人当り繊維消費量は七八年の二・八八キログラムから八八年には四・九三キログラムに増加、この間、化繊は〇・一三キログラムから一・〇九キログラム増え、シェアも四・五%が二二・一%に達してゐる。

〈シルク工業〉

やはり化繊製品が七割に

中国の繊維産業にとって悠久の歴史をもつもう一つの重要な部門「シルク」（絲綢工業）は、養蚕の隘

路もあつて七〇年代までは必ずしも順調な拡大とはいひ切れない面があつた。生糸の生産でみると、五〇年の三〇〇〇トン程度から七〇年代がほぼ二万トン台で推移、八〇年代に入つて三万トンから五万トン台に拡大し、九〇年には五・五万トンに達したが、さほど高い伸びではない。

絹織物ではややこれとは異なつた傾向を示し、特に先にみたように化繊長繊維の生産拡大（輸入の増加もあるが）に並行して織物の生産も増加している。シルク一〇〇%ないしはシルクのウエイトの高い織物は七五年ごろからみると、一・八億メートル程度が八九年では四・一億メートルに拡大はしているものの、絹織物工業全体での織物生産は同期間に四・五億メートルから一六・三億メートルに拡大し、その主力はレーヨン、ナイロン、ポリエステルなどの化繊長繊維織物であつたことになる。なお、絹織工業での織物生産のうち化繊織物のシェアは七〇年代後半の六〇%台弱の水準から八〇年代後半には七〇%台にアップしている。

設備面では織機が六〇年代初めにかけて旧織機のスクラップがあつて一万台程度減少しているが、その後七〇年代には三万台から六万台水準に拡大、さらに八〇年代には二〇万台規模に接近してきている。世界の長繊維織物生産国では日本、韓国が両雄に当たつるが、日本が台数では現在、中国とほぼ同水準の一七万台程度、韓国は一〇万台前後と推定される（ただし、革新織機のウエイトが両国ともに高いので台数からの単純な比較はできない。ちなみに先端水準にある水漬または空気漬のジェット織機は日本が四・五万台強、韓国が二万台弱、中国は一万台前後と見込まれている）。

〔毛紡織工業〕

アクリル、ウールを大量輸入

中国の毛紡織は、現在、二六〇万鍾近い紡機を保有、織機も三万台規模に達している。国産原料は緬羊（いわゆるウール）、カシミヤ、山羊などを入れて二五万トン前後である。この水準は八〇年代に入つて大きく変化していない。一方、設備は紡機が八〇年代初頭に比べて約二〇〇万鍾が増加、織機も二万台前後増加している。さらにセーターなどの編機である丸編機、横編機がこの間に倍増近いテンポで増えている。後先の議論になるが、こうした設備に対応する原料は国産、輸入の原毛のほか化繊にウェイトを移していった点も他の紡織部門と相通じるところがある。毛紡織業の使用原料のうちレーヨン、ポリエステル、ナイロン、アクリルなどの化繊比率は七八年当時の四〇％台から八〇年代末には六〇％台に拡大している。このうちアクリルは国内生産が少ないこともあつて（八九年で一〇万トン）、その多くを輸入に依存している。特に八八年には世界生産の一四％、世界のアクリル輸出の過半近くに相当する三三万トンの大量輸入を行なうなど世界需給への影響も大きなものになっている。

「化繊化」と同時に原毛輸入の動向も注目される。八〇年ごろまではその輸入規模も一、二万トン程度にとどまっていたが、国内需要の盛上がりと輸出の拡大を背景に八五年ごろから急増しはじめ、八八年には二二万トン規模に達し、世界貿易の約一五％を占めるにいたつた。その後は引締政策の影響もあつて減少しているが、その結果、世界の羊毛需給を混乱させる一因にもなっている。

なお、生産ベースでみると、織物、編物に使用される毛糸生産量は、八〇年の五万七〇〇〇トンか

ら八九年には二五万トンに大きく拡大しているが、化繊一〇〇%の糸は全体の六〇%を占める一五万トン、混紡糸を含めると二〇万トンを超える規模に達している。

毛織物の生産内容をみると、七〇年初めの六〇〇〇万メートルの水準から八〇年には一億メートル、八九年には二億八〇〇〇万メートルに拡大し、特に八〇年代の増加スピードが著しい。このうち主にスーツ地などに使用する梳毛織物が七〇年代までは中心であったが、厚地織物に相当する紡毛織物が八〇年代に増加し、八九年には両者が拮抗する規模に達している。なお、総生産のうち純毛織物は二割、他は混紡織物と純化繊織物で、混紡は全体の七五%にも達している。

もう一つ毛紡織工業で比重の高い生産品目である毛布は、これもアクリル、レーヨンなどのウェイトが高いが、七〇年の生産量四四五万枚に対して八〇年には八八四万枚、八九年には三〇〇万枚を突破する水準に達している。このうちアクリル製は半分に達し、純毛製の毛布は二〇%弱の水準である。

4 今後の展望——二〇〇〇年の繊維産業

求められる産業調整

中国の繊維産業は六―五計画、七―五計画を通じて急速な発展をしてきた。しかし、あまりの急成長であっただけにその間、原料需給のひずみが表面化したり、高度化する消費者ニーズの変化に対応で

きないままに、いわゆる適品薄が表面化する一方、低級品や不良品在庫の累増といった問題を表面化させた。また、先端技術や経営ノウハウなどを外資との積極的な提携を通じて導入したところとそうでないところとの企業格差も拡がるなど、随所に混乱を起しているのも事実である。それだけに整合性をもった産業としての調整が急務となってきた。しかも、筆頭輸出産業ではあるが、国際的には管理貿易の下で熾烈な競争にさらされており、国際水準（先進水準）へのキャッチ・アップの加速化も求められるところである。二〇〇〇年にかけてこうした産業への変身がどのように進展するかが大きな課題である。

例えば、国営紡織企業は巨大設備を擁し、余剰労働力を抱え、効率性が悪いうえに単品量産型の生産指向が強いと指摘される一方、五万件、四〇〇万人以上を抱える郷鎮紡織企業のすべてではないが、小回りをきかせて需要動向を的確に掌握、収益性も高く急成長を果たしている企業もあるし、外資との提携関係を強め拡大してきた「三資」企業群は設備、技術、その他ノウハウも含めて内資企業との格差を拡大してきていることが指摘されている。また、こうした動きとは別に原材料の確保は国営企業優先で行なわれ、新興の郷鎮企業などは常に「欠荷」状態におかれ、これが粗悪品出回りの元凶であるとの指摘もある。

表IV-20 紡織業の八-5計画と10カ年計画のアウトライン

	1995	2000
紡織工業総生産額	2,550億元	3,250億元
紡織品輸出額	150~175億ドル	200~235億ドル
1人当り繊維消費量	4.8キロ	5.3キロ
繊維消費量	780万トン	900万トン
綿糸生産高	2,700万梱	3,100万梱
化繊生産高	200万トン	260万トン

(出所) 全国紡織工業庁局長会議での呉文英紡織工業部長発言。

量から質の時代へ

紡織工業部が九〇年に打ち出したスローガンは「質量の年」であり、九一年には「品質、品種、効益の年」である。新鮮味がないが、量から質の時代への転換が必要になってきたことでもある。

九一年からスタートした八―五計画の紡織工業に対するスキームを公的な種々の場での発表を整理してみると、次のようなことがいえる。

紡織業の重点は「資源の有効配分、企業組織の調整、規模の効益と組織効益の実現」においている。部門別には合繊原料と合繊ファイバーの拡充と紡織など繊維機械の発展に注力する。さらに輸出拡大を進め、このために企業と企業集団の直接貿易を促進する、としている。この前提となる原料問題の解決が急務であり、この点については大型合繊プラントの早期建設と合繊原料の自給化比率の向上を掲げている。現在ポリエステルに偏重している生産品目の多品種化、特にアクリルやナイロンの新増設とその原料確保が必要になってくる。

具体的な紡織工業の計画数値として明らかにされているものは、今後五年から十年間の紡織工業の成長率を実質ベースで平均五く六%、紡織品輸出額を九五年には一五〇く一七五億ドル、二〇〇年には二〇〇く二三五億ドルなどを設定している。

いずれにしても持続的安定のなかで繊維産業の調整をどのように進めていくか、特に川上、川中、川下の各加工段階の均衡と技術水準をどのように高めるか、そして引きつづき「輸出先導産業」としての地位をこうした改革を通じて保つていくか、今後の五く十年の動向が注目されるところである。

〔參考文獻・資料〕

- (1) 中国社会科学出版社『当代中国的紡織工業』、一九八四年。
- (2) 紡織工業出版社『中国紡織工業年鑑』(隔年刊)。
- (3) 紡織工業出版社『中国紡織報』(隔日刊)。
- (4) 紡織部經濟研究中心『中国纖維手冊』(年刊)。
- (5) 經濟管理出版社『中国經濟年鑑』(年刊)。
- (6) 中国統計出版社『中国統計年鑑』(年刊)。
- (7) 經濟導報社『中国海關統計』(四半期刊)。